

外国語学習から見た鳥居龍蔵の学問的な歩み

ラファエル・アバ

はじめに

戦後から現在に至るまで鳥居龍蔵（1870-1953）の人物像、学問的な歩みや、各地域で行った調査に対する学史的な評価や関心は一定のものではなく、いくつかの波が見られる。鳴門市妙見山に鳥居記念博物館が建設された1965年、朝日新聞社『鳥居龍蔵全集』が出版された1970年代後半、その二つの波のあと、一旦関心が薄くなったようである。例えば、近年刊行された鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵研究参考資料』を検討すると、1980年代に掲載された関連文献が極めて少ないことを確認できる。しかし、1990年代から再びその関心は高まりを見せる。その背景には、『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵土撮影写真資料カタログ』（1990年）の刊行、およびその成果を踏まえた「乾板に刻まれた世界一鳥居龍蔵の見たアジア」の企画展（1991年）の反響が大きかったと思われる。これを受けて国立民族学博物館（1993年）、徳島県立博物館（1993年）、北海道立北方民族博物館（1994年）などにおいて鳥居龍蔵展が相次いで開催され、鳥居の研究業績は再評価され始めたのである。

ところが、このような状況にもかかわらず、鳥居の学問的な歩みや思想のなかに実はまだ解明が待たれる興味深い課題が数多く存在する。例えば、同世代の日本人類学者のうち鳥居ほど研究成果を国際的に発信する必要性を意識したものがない中、鳥居は1910年から西洋に向けて「人類学研究・台湾の先住民」を初めとする仏語論文を相次いで刊行していった。にもかかわらず、同時代のヨーロッパ、とくにフランスの人類学界での鳥居の業績がどのような評価を受け、そしてどのような影響を与えたかという点については先行研究がみられない。

筆者は以前からこの課題に興味をもち、現在もフランス語文献を含めて資料の整理・検討中であるが、鳥居の国際的な位置づけを明らかにするためにはまず一つの前作業が必要と考える。それはつまり、鳥居がどのように外国語を学習したのかというプロセスの解明である。筆者は本稿で論じるように、その過程を単純に語学学習上の問題として捉えるのではなく、これを包括的に分析することによって、鳥居を取り巻く人間関係や学問的な知識の摂取、学界状況など様々な要素や側面が相互に関連していたことがわかる。そして鳥居の研究成果の国際的な発信において中心的な役割を果たしたフランス語との関係はいつ、なぜ、どのように生まれたのかという問いに対して初めて明確な答えを得ることができる。

本稿では、このような課題認識のもとで、鳥居龍蔵の学問的な歩みを外国語学習という観点から検討し、英語・ドイツ語・ロシア語・フランス語という言語が彼の研究や思想において果たした役割について論じてみたい。

I 外国語・洋書との出会い

周知のように日本では近代的な学校教育制度の基礎が形作られたのは明治維新直後のことである。最初の教育法令は1872（明治5）年に太政官布告で公布された「学制」で、これによって小学・中学・大学という三段階からなる学区制が決定され、また教員養成のために師範学校が設けられた〔山住1987〕。そして早くから外国語教育、殊に英語教育の必要性を認識した太政官は、上等小学（10-13歳）では「外国語学ノ一二」も「斟酌シテ教エルコトアルヘシ」と布告した。しかし1879年の教育令公布により、欧米の教育制度を規範とした「学制」は廃止され、小学校の教科目から外国語が一時的に排

除された。それでも実際には英語教育を継続した学校も存在し、また欧化主義が頂点に達したいわゆる鹿鳴館時代のただ中で、「小学校教則綱領中改正」(1884年)が出され、これによって英語科が本格的に復活したのである [江利1996]。

このような状況下で鳥居龍蔵が最初に出会った外国語は英語だった。鳥居は自伝『ある老学徒の手記』のなかで次のように述べている。

いよいよ中学に入る時期になると、私ははじめて英語を学んだ。先生ははじめて徳島中学校の英語教師として来られた、札幌農学校卒業の農学士、諏訪鹿蔵という讃岐の人で、この時、中学校でも正式に学科の中に英語を入れたのであった。先生は学校から帰ってから自宅でも英語を教えておられ、ここに学ぶ人は町家の師弟が多かった。私はこの先生に『スペルリング書』から習い始めた。なお二、三の外人その他の先生についてもこれを学んだ。そのため東京から大きな『英和字書』を求めたが、これは珍しいとて見に来る人も多かった。[鳥居1953：16-17]

諏訪鹿三と英語教育 諏訪鹿三(「鹿蔵」は誤り)は1857(安政4)年に高松藩士の家(現愛媛県)に生まれた⁽¹⁾。1877(明治10)年に現在の東京大学工学部の前身の一つである工部大学校予科を卒業し、ただちに官費生として新渡戸稲造(1862-1933)、内村鑑三(1861-1930)らとともに1876(明治9)年設立の札幌農学校に入学した。1882年に農学士の学位を得、卒業した(第二期生)後に札幌県に勤務したが、まもなく北海道を去り(1883年のことか)、徳島県の徳島師範学校・徳島尋常中学校などで教鞭をとった。小学校2年生で退学し自学自修を始めるという鳥居が諏訪から英語を学んだのはこの時であると推定できる。しかし諏訪はその後、1887か1888年に東京に移り⁽²⁾、私立学校などで講義を行いながら、農業の振興に携わった。1892年に園芸協会の通訳としてアメリカに渡り、農業経済学、農業に関する教育制度や植民政策などの調査に取り組んだが、翌1893年にコロンブスのアメリカ大陸発見400周年を記念してシカゴで国際博覧会が開催されたときに、審査官を選ばれて、審査委員長となった。1894年に帰朝し、1898年に河西(現十勝)支庁長に任ぜられたが、四年後退職し、1928(昭和3)年死去するまで農牧業を自営した。



図1 諏訪鹿三
諏訪は鳥居の最初の外国語教師([南1928]より転載)。

工部大学校(この名称は1877年以降)は1871年に設立され、教頭を務めたヘンリー・ダイアー(Henry Dyer, 1848-1918)をはじめ多数のイギリス人、特にスコットランド人を教師として雇用し、授業はすべて英語で進められただけでなく、大学での生活もまるで「スコットランド風そのままの学校生活を日本に移」したようなものであったという [高梨1978：100]。また、初期の札幌農学校は外国人教師による講義がすべて英語で行われたが、それに加えて多彩な内容の英語教育(英和作文、翻訳、英文学史、話法など)が実施され、さらに外国人教師と生徒との触れ合いは教室内にとどまらず、運動会や修学旅行など様々な場面に及んでいた [北海道大学編著1982]。このようにして、その当時の大学での外国語学習はこんにちでいう「イメージ・プログラム」(没入法)に近いものといえるのかもしれない。

札幌農学校での成績を見る限り、諏訪はよくできた生徒ではなかったようだが⁽³⁾、当時非常に限られた「大学生」という知的なエリートの一員で、卒業後、スコットランド人の有名な農学化学者ジェイムス・F・W・ジョンストン(James F. W. Johnston, 1796-1855)の*Catechism of Agricultural Chemistry*(『農業化学書』) [諏訪編訳1887]を和訳したり、英語の論文を執筆したり [Suwa 1901 (1893)], 彼の英語能力が優れていたのは確かである。

『スペルリング書』は特定の「教科書」ではなく、最も基本的な部分であるアルファベットの文字と発音のルールを知るためのSpelling Bookの日本語の一般和称である。その原点は1866(慶応2)年に出

版された『英語階梯』（英名*English Spelling-Book*）である。本書が作られた当時は、世界の「中心」は大英帝国であるという認識が次第に高まり、英語学習者の数も増加した時期であったが、1880年代になると、この種の読み物はその隆盛を極め、50種以上世に出た。そして中学校の英語教科書にもその内容の一部が採用され、学習者に大きな影響を与えた、という〔南1989〕。一方、現時点においては鳥居のいう『英和字書』が何であったかを特定することができなかった。⁽⁴⁾

阿波文庫 さて、鳥居が英語を習い始めたこの時期に、早くも単なる英語教材とは異なる洋書に接触する機会が訪れた。

阿波文庫は、その頃中学校内に移されていた。私はその文庫に入って種々の書籍を見た。先ずはじめて見て驚いたのは、かのペルリの『航海記』で、その挿絵を見て、その当時がしのばれた。また、フランス文の考古学の本もあって、これは師範学校の山内先生に読んでもらった。（この本はその後東京に行きパリから買い求め、今もこれを所持している。）阿波藩は、維新前後に文明開化の徴は早くからあったことがわかる。〔鳥居1953：18〕

六万冊を誇ったとされる阿波文庫または阿波国文庫とは、徳島藩主であった蜂須賀家が所蔵していた書籍のことで、儒学者の柴野栗山（1736-1807）の蔵書と、江戸幕府御家人・国学者の屋代弘賢（1758-1841）の蔵書を中心に収集された文庫であったという⁽⁵⁾。蔵書群は本来、阿波の徳島城内の書庫と江戸の蜂須賀藩邸雀林荘内の萬巻楼と呼ばれた土蔵に分けて保管されていたようであるが、明治維新後に雀林荘の阿波国文庫は国元に送られて一つになった。その後、1869（明治2）年に開校された藩校西の丸長久館、1874年開校の期成師範学校（現在の徳島大学総合科学部）、1879年開校の徳島中学校（現在の城南高等学校）において阿波国文庫の大部分が保管・公開されたが、1884年2月に起きた師範学校の火災によって文庫の一部が焼失したとされる。その後1918（大正7）年に徳島県立光慶図書館が設立されると阿波国文庫は同図書館に移管されたが、太平洋戦争中の空襲（1945年）によりそのほとんどが焼失した。

数ある書籍の中でも、まず鳥居の好奇心を捉えたのは「かのペルリの『航海記』」つまり、アメリカ海軍将官のマシュー・ペリー（Matthew Perry, 1794-1858）の*Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*（『日本遠征記』）である〔Hawks 1856〕。この著書はペリーが中国海域および日本に来航した際の記録に基づいて編集されたもので1856年にアメリカで刊行されたものだが、その日本語訳が初めて刊行されたのは56年後の1912年のことである〔鈴木1912〕。我々が特に注目すべきは、ペリーが訪れた地域の風習、衣装や建築などを精密に捉えている150以上の石版画と木版画である。この著書は、激しく変貌していく江戸から明治への日本とその周辺地域の様子を示すもので、鳥居にとって、「異文化」や「異人種」・「異民族」への興味をかきたてるものとして評価すべきであろう。一方残念ながら、「フランス文の考古学の本」の方は、現時点では特定できなかった。

いずれにしても、1882年に徳島中学校に収蔵されていた洋書の数はすでに約400冊に

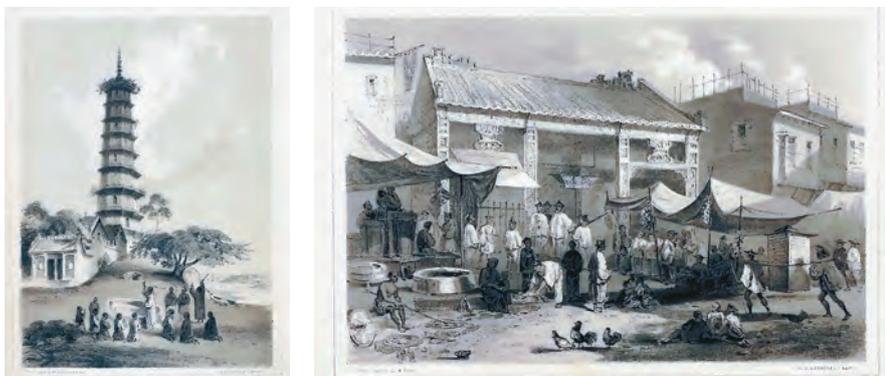


図2 『日本遠征記』

ペリーに率いられた米国艦隊はマデイラ諸島・ケープタウン・モーリシャス・セイロン・シンガポール・マカオ・香港・上海・琉球（沖縄）を経由して1853年日本に来航した。その航海をまとめた『日本遠征記』はこれらの地域を鮮明に描き出して、鳥居に多大な影響を与えたに違いない。左は黄浦のパゴダ（135頁）、右は広州市の魚市場（138頁）。

上っていたことがわかっている [徳島県立光慶図書館編1922:28]。おそらくその背景には幕末までさかのぼる阿波と洋学（蘭学）との関係を窺うことができるであろう。すなわち、1856（安政3）年に江戸八丁堀藩邸内長久館という文武学校が創設され、阿波徳島藩の第13代藩主の蜂須賀斎裕（1821-1868）は洋学修業のため数人の藩士を長崎に留学させ、1868年に藩主となった蜂須賀茂韶（1846-1918）も東京などへ数十人を遊学させた [池田1970]。1865（慶応1）年徳島に洋学校が開校し、オランダ語学習のみならず、英語教育も始まり、1869年に開校した藩校西の丸長久館に至ってはそのほとんどが英学となり、英語・世界史・地理・国際法などの授業が行われた。そして茂韶自身は1872年から1879年までイギリスに留学し、帰朝後東京府知事、第二代貴族院議長、文部大臣などを務める一方、自由民権運動を支援していたという [三好・大和編著1983]。

考古学の本 徳島中学校附属図書館が創設された当時、地方民一般の読書に対する関心は薄く、来館者の人数は少なかったという。そのため、読書家の鳥居の姿は注目を集めたであろう。しかし、師範学校編『小学読本』第一巻にあった世界の人類は5人種に分かれるとの記述から人類学に興味を覚えたという鳥居の好奇心や知識欲は早くも身近な書籍で満たされなくなっていた。1886年に東京人類学会に入会して、当時帝国大学動物学科大学院生であった坪井正五郎（1863-1913）との交流を始め、すぐに原書の専門書について情報を求めるようになった。そうして鳥居が手に入れたのは*Man before Metals*と*Notes on ancient stone implements, &c., of Japan*という二冊であった。

[1887年の頃に：筆者補足]⁽⁶⁾ ● ● ●⁽⁷⁾ 谷千成先生に東京に行く用が出来て出発される時、私は先生に、あちらで坪井先生に会って、人類学に関する原書は何から読んでよいかを尋ね、その適当な本を買って来ていただきたいと依頼した。先生は坪井先生から、この書物を丸善で買うようにと教えられ、同店でJoly: *Man before Metals*と、神田孝平先生著英文『日本石器考』の二冊を求めて帰国、これを私に渡された。

前者ジョリーの本は、人類学よりも先史考古学の方に属するが、兎に角有益のもので、早速読み始めたが、私の英語の知識はなお不足であったから、各章の理解しにくい箇所は、幸いにして徳島中学主任（高等師範学校卒業生）吉見先生に教えを求めることができた。吉見先生も術語やその他で困られたようであったが、私は先ずこの書で人類の起源からその発達、旧石器時代、新石器時代の人種やその生活、文化等を知るようになった。[鳥居1953:20]

Man before Metals（『金属以前の人類』）はフランス人のニコラ・ジョリー（Nicolas Joly, 1812-1885）著*L'Homme Avant Les Métaux*の英訳である。ジョリーは1840年にパリ大学で理学博士号を取得した後、パリ人類学学校（l'Ecole d'anthropologie de Paris）の創設者の一人であり、人類学者のカトルファージュ（Armand de Quatrefages, 1810-1892）の代用としてトゥールーズ大学理学部で教職に就いたが、さらに1851年にモンペリエ大学で医学博士を取得し、1857年にトゥールーズ大学医学部で生理学講座を担当するようになった。生物学・動物学・生理学・解剖学・奇形学など様々な分野の研究に携わり、ヨーロッパの科学史のなかで特に近代細菌学の開祖とされるルイ・パスツール（Louis Pasteur, 1822-1895）に反論した一人として知られるが、先史学や考古学方面にも専門書や論文をいくつか残している [Alix 1891]。

豊富な図入りで本文が300頁を超える*L'Homme Avant Les Métaux*の初版（フランス語

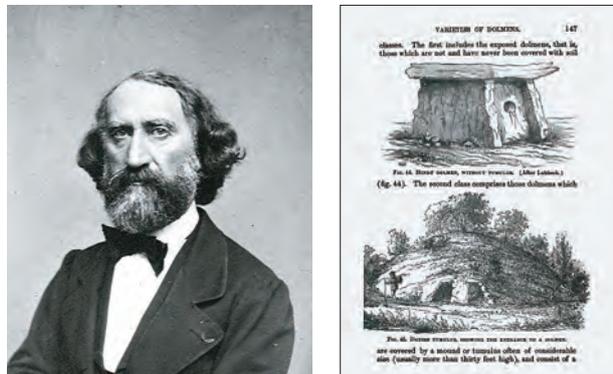


図3 ジョリーと『金属以前の人類』

フランス人のニコラ・ジョリーが著した『金属以前の人類』は鳥居が初めて見た欧文考古学文献の一つで、そのなかにドルメン、メンヒルや墳丘墓などヨーロッパの先史文化を代表する遺跡のイラストをみることができ（写真はフランス国立医科学院提供）。

版)は1879年に出版され、好評の中で、版を重ねるだけでなく⁽⁸⁾、1883年にはその英訳も出版された。第一部*L'antiquité du genre human* (「人類の遠古」)と第二部*La civilisation primitive* (「原始文明」)という二部から成る。前者は近代的な地質学の時代区分を紹介した後、三時代法(石器時代・青銅器時代・鉄器時代)や四時代法(旧石器時代・新石器時代・青銅器時代・鉄器時代)など考古学的な時代区分法と時代変遷、19世紀にフランスやイギリスの洞窟で発見された旧石器時代の人骨、デンマークの泥炭沼と貝塚、スイスの湖上住居やイタリアのサルデーニャ島の建造物ヌラーゲ(単一形はヌラーギ)などヨーロッパの新石器時代の文化を代表する遺跡やアメリカ大陸における先史時代の人類の痕跡を詳細に説明している。興味深いことには、鳥居のライフワークのテーマの一つであり、彼の東アジア研究の原点となったドルメンについても記述されている(原書135-147頁、英訳144-159頁)。第二部は、火を起こす発火法の発明や食物の処理法をはじめとして、石器・道具・武器の作り方、農業や家畜の起源、交易や航海、言語と文字の誕生など、先史時代の人類の文化や生活様式を様々な観点から詳しく検討している [Joly 1883]。

1883年8月にアメリカの科学雑誌*The American Naturalist*に掲載された書評によると、著者のジョリーは先史時代の人類の解明において先駆的な役割を果たしたフランスの科学コミュニティーのメンバーとして注目される人物で、この書はチャールズ・ライエル、エドワード・タイラー、ジョン・ラボックなど第一級学者の著作と肩を並べるほどではないものの、読者に人類の遠古を示す様々な証拠を与えつつ、面白く読める本だという [The American Naturalist(ed.)1883]。 *L'Homme Avant Les Métaux* は一般読者を念頭において分かりやすいスタイルで書かれたものではあるが、その当時は考古学や人類学の専門用語の意味を調べようにも、そういった洋書がまだ日本には無かった時代で、その頃15か16歳だった鳥居にとっては内容を理解するのは容易ではなかったはずである。しかし、この著書との出会いによって鳥居は、他国よりも早く確立したフランスの先史考古学研究の具体的な成果を知るだけでなく、新たな世界観に目を見開かされたのである。

他方、『日本石器考』を著したのは神田孝平(1830-1898)で、彼は洋学者・啓蒙思想家で明六社や東京学士会院をはじめとして多くの分野で活躍する一方、晩年には考古学にも興味をいだき、東京人類学会の初代会長を務めた。

本来の目的は海外の学者に日本で発見された石器を外国の研究者に紹介するということで、孝平は日本語の原書をその養子で英語研究者の神田乃武(1857-1923)に依頼した。著書は*Notes on ancient stone implements, &c., of Japan*という表題で1884年1月に刊行された [Kanda 1884]。八頁の短文で、石器を示す24枚の図版および旧国名を示す折込みの日本地図1枚からなる。日本語の原文もまた、二年後の1886年4月に『日本大古石器考』という表題で刊行されたが、図版はすべて省略されている [神田 1886]。

*Notes on ancient stone implements, &c., of Japan*の内容は日本の近世社会のなかで生み出された骨董趣味から西洋科学の導入によって展開する近代考古学研究への「移行期」に位置付けられるものである [アバ2008]。神田は例えばイギリス人のジョン・ラボックが提唱した法則に従って、日本で発見される石器時代の石器を“chipped stone implements”(「打製石器」)と“polished stone implements”(「磨製石器」)との二種類に分けたが、前者のなかには“Yanone-ishi or Arrow-heads”(「石鏃」)、“Hoko-ishi or Spear-heads”(「石鋒」)、“Tengu-no-meshigai or Rice-spoons of the Tengu (mountain gnomes)”(「天狗匙」)、“Fundon-ishi or Pound-stones”(「分銅石」)、“Raifu or Thunder-bolts”(「雷斧」)、“Raitsui or Thunder-clubs”(「雷鎚」)、“Sekiken or Stone-daggers”(「石劔」)などと、江戸時代の好古家の色彩を色濃く纏った呼称を用いている⁽⁹⁾。さらに神田は打製石器の作り手について論じるうえで、“The race by whom these chipped implements were used is probably that spoken of in ancient annals as *Yezzo*, the ancestors of the present Aino race” [Kanda 1884: 2] と述べており⁽¹⁰⁾、これは後に東京人類学会を主な活躍の舞台として坪井正五郎、白井光太郎、小金井良精などの間に展開していく日本石器時代人論争の始まりを告げるものである。

外国語の知識はまだ乏しいとはいえ、この二冊の著書は少年の鳥居に相当大きな影響を与えたのは間違いないであろう。ジョリーの*L'Homme Avant Les Métaux*は人類の化石やその遺跡・遺物を網羅的に研究することによって、文字文献が登場する前の人間の過去をどのように復原できるかという、先史学の成果を見事に披露したものであった。そして神田の*Notes on ancient stone implements, &c., of Japan*は、西洋考古学の原則を採用しながら、江戸時代の骨董趣味に根差していた「古物」へのこだわりや関心の体系化を示すものであった。

タイラーと『人類学』 しかし、これらに加えて鳥居の学問観の基礎を理解するために欠かせない、もう一冊が存在する。

坪井先生は当時、動物学科大学院学生であって、大学より九州に出張を命ぜられ、その帰途讃岐の高松に立寄られ福家氏を訪い、同氏を伴って来県されたのである。私の家に両三日宿泊され、私は勝浦郡旗山古墳などを案内した。また宿泊中、坪井先生より直接人類学上のことについて教示せらるる所が多かった。先生はカバンの中からTylor: *Anthropology*を出して示され、是非この本から読み始める方がよいと勧められた。[鳥居1953: 21]

1888年2月に坪井は九州出張の帰途、突然鳥居家を訪ね、三日ほどそこに宿泊した。坪井は滞在中、「人類学とは何ぞや」という題で演説を行ったが、その内容はおそらく前年『東京人類学会雑誌』に掲載された「人類学当今の有様」をまとめたものと筆者は考えている [坪井1887]。さらには坪井が鳥居にその際勧めたのは、名高いイギリスの人類学者エドワード・バーネット・タイラー (Edward Burnett Tylor, 1832-1917) 著*Anthropology: an introduction to the study of man and civilization* (『人類学—人類および文明の研究入門』) である [Tylor 1881]。タイラーはキリスト教プロテスタントの一派であるクエーカー教徒としてロンドンで育てられ、高等教育は受けなかったが、結核と思わしき症状を発症したために1855年にキューバへ旅立ち、そこでメキシコのトルテカ文明の遺跡調査に招かれた。この体験をきっかけとして他文化に対して興味を抱き、人類学者として本格的に研究を進めるようになった [Tylor 1865]。ただしメキシコでの経験を除いては、彼の大半の知識は自分自身のフィールドワークではなく、古典文献やヨーロッパ人探検家の記録などから得られたものである [Stocking 1979]。

タイラーの最も重要な著作である*Primitive Culture* (『原始文化』) は鳥居が生まれて一年後の1871年に出版された [Tylor 1871]⁽¹¹⁾。タイラーはそこで、当時の思想界に多大な影響を及ぼした進化論的な観点から「文化」や「残存」(survival)の概念を定義し、また宗教の起源をアニミズムであるとした。それから、10年後の1881年に人類学の最初の「教科書」とされる*Anthropology: an introduction to the study of man and civilization*を出版した [Tylor 1881]。その内容は440頁に及び、16章に分けられている。タイラーは一般読者に人類文化のあらゆる要素や側面が時代を通じて進化してきたことを示すことを主眼として、道具の発達、衣服、芸術、交易など様々なテーマを明快なスタイルで論じている。この著書はまさしくそれまでの人類学的な知識を概括するものといえる。

武田丑太郎とドイツ語 鳥居龍次郎によると、龍蔵は徳島在住の少年時代にフランス語の勉強も始めていた [鳥居1977] が、これについては『ある老学徒の手記』のなかに詳細な情報を見出すことができない。しかし、この時期に鳥居が英語の他にドイツ語も勉強し始めたのは確実である。

私は数学の知識がゼロであったから、徳島市佐古町の人武田丑太郎先生や、江口政太先生について数学を学んだが、当時生意気にもこれらの教科書は英文のものを以てした。またドイツ語の必要は前から感じていて学んでいたが、武田先生について『独乙読本』第四冊まで教えてもらった。武田先生は郷土には稀な学者で、数学が専門であられたが、読書は英仏独のみならず、オランダ語までもよくせられ、現にむずかしい『独乙読本』第四冊も自由におしえられるほどであっ

た。[鳥居1953：22]

武田丑太郎（1859-1917）は藩校・長久館で阿部有清（1812-1897）の下で数学を学んだ後、1876年に徳島中学校（現城南高校）で教職に就いた。明治・大正時代にわたって徳島の数学教育をリードした教師として知られている〔西條2009〕が、その外国語の知識も優れていたようである。一方、なぜ鳥居はドイツ語の必要を感じたのか、その理由について彼自身の記述はないが、鳥居とドイツ語との関係を考える上で忘れてはならないのは、当時の国際的な動向であろう。ドイツ語熱は明治時代の初めには、英語やフランス語に比べるとそれほど高いものではなかったが、ドイツ帝国の誕生を契機に日本人はドイツの科学、殊に医学の優秀性を意識するようになったという〔宮永2004〕。そして大隈重信の下野という明治十四年の政変（1881年10月）が物語るように、1880年代に入ると、日本はドイツを「師」と仰いで近代国家づくりを急ぐようになった。以降、ドイツの影響力は明治初年より顕著であった自然科学のみでなく、人文・社会科学の分野にも及び、日本においてドイツ学が隆盛を極めた。本論文の第二部で論じるように、鳥居はその「東京遊学時代」に様々な外国語と接触する環境に身を置いたが、その中でドイツ語は重要な位置を占めるようになったのである。

II 東京帝国大学時代における外国語学習

坪井正五郎はヨーロッパ留学のために1889年6月に日本を離れ、翌7月にフランスの首都パリに着いた〔東京人類学会編1888〕。そしてパリ万国博覧会を訪れた後、11月にロンドンに向かい〔坪井1888〕、1892年10月までイギリスに滞在した。1890（明治23）年9月に上京した鳥居は、パリの到着後から『東京人類学会雑誌』に「パリー通信」や「ロンドン通信」を連載していた坪井が留学中であることを承知していたはずであるが、「頼るべき坪井の留守中に上京せざるをえないほどの逼迫したものが鳥居のなかにあったのだろうか」と推測される〔天羽2011：23〕。

人類学教室 坪井との再会を果たすことができなかったものの、鳥居は早くも東京人類学会の「拠点」ともなっていた東京帝国大学の人類学教室に足を向けた。そこで、当然ながらすぐに彼が目を留めたのはガラスの陳列ケースの中にあった専門の洋書である。

明治二十三、四年頃の石器や土器の採集、貝塚の探査などは、今日のように小学や中学の生徒達やアマチュアまでがやるのとはちがい、専ら大学の人類学教室の人々や、東京人類学会員達だけに限っていた。東京人類学会は当時多少の会員を有し、機関雑誌も発行し、会員達がこれに論文報告を登載していた。また教室の隅の小さなガラス箱の中にはタイラーの『人類学』、エヴァンスの『英国の石器』、ラボックの『有史以前』、タイラーの『原始文化』『人類の早世史』等の著が蔵されていた。〔鳥居1953：28〕

エドワード・バーネット・タイラー（Edward Burnett Tylor, 1832-1917）の『人類の早世史』（*Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization*, 1865）・『原始文化』（*Primitive Culture*, 1871）・『人類学』（*Anthropology: an introduction to the study of man and civilization*, 1881年）、ジョン・エヴァンス（John Evans, 1823-1908）の『英国の石器』（*The Ancient Stone Implements, Weapons and Ornaments of Great Britain*, 1872）、そしてジョン・ラボック（John Lubbock, 1834-1913）の『有史以前』（*Pre-historic Times, As Illustrated by Ancient Remains, and the Manners and Customs of Modern Savages*, 1865）。これらの洋書は1870年代までのイギリスにおける人類学や先史考古学という学問の総括といえるが、ここで忘れてはならないのは、今日的な基準で言えば異なる専門分野に属するタイラー、エヴァンスおよびラボックの著書は、進化論が多く支持を得て次第に影響を広がっていったのと同じコンテキストのなかで生み出されたもので、その詳細な内容はさておき、人類の遠古、人類の精神的な

単一性 (psychic unity of mankind) や文化の前進的発達という共通の理念を有していた、ということである。⁽¹²⁾ それと同時に、人類学教室に収蔵された洋書や坪井の留学から窺えるように、鳥居も含めて近代日本における当初の人類学や先史考古学はこのようなイギリス的思想の影響を色濃く受けてスタートしたことであった。ただし、これから論じるように、学者としての道を歩み始める鳥居は早くも異なる思想や学問観と接触する機会を求めてゆく。

ドイツ語 鳥居は陳列ケースの中の洋書に手をかけようとしたところ、坪井が不在にしている間に人類学教室の留守番をしていた若林勝邦 (1862-1904) は大変怒り、以後の教室訪問を拒否した、というエピソードがよく知られている [鳥居1853:28]。手記によると、若林はとくに「石器時代の貝塚調査に熱心」であった [鳥居1853:26] が、歴史遺物の方面にも関心があり、その頃に例えば銅鼓について論文を執筆している [若林1890]。このように鳥居と「意外な」接点があったが、残念なことにその関係は友好的にはならなかった。

それとは別に、鳥居が人類学教室に再び出入りできるようになったのは坪井がイギリスから帰国した1892年10月以降のことであるが、その間に小杉楹邨 (1835-1910)、三宅米吉 (1860-1929)、神田孝平 (1830-1898) など様々な師から教えを受け、またドイツ語の習得を開始した。

私は人類学教室に行かなくなってから、別の方法を取って勉強することとした。即ち東京到着早々から通い始めた本郷弓町のドイツ語学校でドイツ語の勉強を続け、なお三宅米吉先生の所に通って史学、歴史考古学の教えを受け、更に木村熊治先生 (旧櫻井地理局長の弟) の紹介で、田口卯吉先生の所に通うこととなった。[鳥居1953:28-29]

東京においては、1870年代初頭からドイツ語を教える私塾・家塾・私学校などが盛んに開設されるようになり、とくにドイツ語に対する学習熱が上がったのは、当時官立学校に入学するには簡単なドイツ語の試験があり、その準備のための教育機関が必要になったからという [宮永2004]。当時本郷弓町にはドイツ語学校が三校あった。それは、「共研学舎」(本郷区本郷弓町二丁目三十四番地、開設申請年月は1880年7月)、「独文学舎」(本郷弓町二丁目四番地、開設申請年月は1881年1月) および「東京全修学校」(本郷区弓町二丁目四番地、開設申請年月は1885年9月) であるが、現時点においては鳥居のいう「ドイツ語学校」を特定することができないため、この点についてはさらに検討する必要がある。⁽¹³⁾

いずれにしても、鳥居の学問的な歩みの中で起きた二つの大きな出来事が、ドイツ語習得に関連していたことを指摘できる。一つは「土俗談話会」(土俗会) の発足。もう一つはシュリーマンとの「出会い」である。

この時期 [1893年:筆者補足] において私として記念とすべきは、私がドイツ語を学習していた関係上、神田のドイツ協会学校に知人をもっていたので、この人々と相談し、一日ある級の学生を一堂に集めてもらって、土俗会なるものを設けた。[鳥居1953:30]

土俗談話会の発足は『東京人類学会雑誌』に掲載された「土俗会談話録」(第94号)・「第二回土俗会」(第102号) が詳しく記述している [東京人類学会編1894a・1984b]。ここで発行人としては鳥居の他に「常陸筑波郡の小西孝四郎」と「羽前西置賜郡の小林庄藏君」という二人の人物があげられているが、彼らが鳥居のいうドイツ協会学校の「知人」かどうかは不明である。⁽¹⁴⁾ 土俗談話会の会合は1893(明治26)年から1899(明治32)年にかけて、日本各地から人々が参加する夏期講習会の機会を利用する形で、合計7回行われた。会の主旨は、各地出身者が主題に基づいて、出身地域の土俗=風俗・慣習を発表するというもので、情報交換の場として設けられていたという。今日の日本民俗学研究的の初期段階を代表するものとして評価されている [曾我部その他2007]。

さらにはドイツ語関係者のなかに丸山通一という人物がいる。

本郷壹岐殿坂にドイツ皇室プロテスタン教会があり、その創立者はスピネル博士で、同教会内にドイツ語を以て有名なる三並良、丸山通一、向軍治の三氏（ドイツ協会学校卒業生）があった。私はある日この会堂に丸山通一氏の講演があると聞き、⁽¹⁵⁾通りがかりに立ちよって見ると、その演題は「シュリーマン氏の死を悼む」というのであったから、私は耳をかけむけてよく聞いた。
[鳥居1953：31]

まるやまみちかず
丸山通一（1869-1938）は、ドイツの普及福音新教伝道会より日本に派遣されたスイス人の宣教師ウィルフリード・スピネル（Wilfried Spinner, 1854-1918）が設立した新教神学校を1892年に卒業した後、三並良（1865-1940）や向軍治（1865-1943）とともに日本のキリスト教界の一勢力をなした普及福音新教会で中心的役割を果たした人物で〔日外アソシエーツ編2011〕、1900年代以後、教育家やドイツ語・ドイツ文化専門家として大いに活躍した。⁽¹⁶⁾

周知のとおり、ハインリッヒ・シュリーマン（Heinrich Schliemann, 1822-1890）はドイツの実業家でフィールド考古学の先駆者で、幼少時にホメロスの『イーリアス』を史実と信じ、伝説の都市とされたトロイアを発見、発掘した。20世紀からはシュリーマンによるトロイアの発掘調査は粗暴なものとしてされ、しばしば批判の対象となってきたが、このような評価でとくにピット・リバーズ（Pitt Rivers, 1827-1900）やフリンダース・ピートリー（Flinders Petrie, 1853-1942）などのものは、世紀転換期に始まった考古学の方法論的改革を前提としたものであり、19世紀における厳密な意味での考古学の「専門家」の不在や技術的な限界を考慮したものではない。なによりも、かつてツェーラムがその名作『神・墓・学者—考古学の物語』で述べたように、トロイアの発見はドイツの学界に大きなショックを与えるものであったが、教養人というかぎられた世界ばかりでなく、あらゆる人々との間に旋風を巻き起こした。ツェーラムは次のように述べている。

学問研究の発展をはるかにさかのぼってよく観察すれば、偉大な発見の多くが「好事家」, 「門外漢」, またはまったくの「独学者」の手でおこなわれてきたのだということを、われわれはやすやすと立証してみせることができる。彼らは専門的教養の制約を感じず、また専門主義の目隠しも知らず、ある観念にとり憑かれて、アカデミックな伝統の築きあげた垣根をとびこえていった。
[ツェーラム1962：67]

丸山の講演を聞いて大いに興奮したという鳥居は小学校を中退し学歴も資格もない自分をシュリーマンになぞらえたであろう。ただし、まずここで注目しておきたいのは、シュリーマンとの「出会い」の背景には明治時代の日本社会においてドイツ語ならびにドイツ文化の学習熱があったということである。それ以降、鳥居のドイツ語に対する関心は単なる言語学上のものではなく、外国語を一つの有用な道具として手に入れ生かすという意識に基づくものであった。例えば近年、吉開将人が述べるように、鳥居は日本の銅鼓研究において先駆的な役割を果たした〔吉開2013〕が、その研究の基盤においてドイツ語文献を直接に取り扱うことできるという能力が必要不可欠なものであった。

人類学の書籍 坪井が帰国した後、鳥居は人類学教室の「標本整理係」の職に就くことができたが、「用務」のかたわら、東京帝国大学の理科、文科を問わず好みの学科の講義を受け、また坪井がロンドンやパリで購入した専門書の読書に専念した。

先生の人類学講義を聴いていた私は、これとともに、まず世界の諸人種の地理学的分布、その生活状態、その文化等を知らねばならぬということを先生から教示された。当時の世界諸人種に関する書籍は、古くはウードの『諸人種志』その他フィギュエ、ブラオン、ベッターニーの『諸人

種志』の如きで、土俗はベッセル『人種志』等であり、傍ら参考としてキャプテン・クックの『航海志』、プリチャードの『人種志』、ヅカートルファジ⁽¹⁷⁾の『ヒューマン・スペースス』等、人類学はトピナールの『人類学』であって、先生は以上の人種志を各篇章ずつ読んでみるとよいと言われ、私は辞書を引きつつその教示に従い、これを実行した。[鳥居1953：37]

タイラー、ジョリーやエヴァンスの著書によって人類学や先史考古学の基礎知識を得た鳥居は次回より詳細な知識を習得しにいく。例えば、身体測定学の基礎を確立したといわれるフランスの人類学者カトルファージュ (Armand de Quatrefages, 1810-1912) は上記の『ヒューマン・スペースス』(*The Human Species*, 1879) で人類の起源、人種の形成、化石人類や現代人類の頭蓋骨の特徴などについて仔細に論じている [Quatrefages 1879]。さらにいえば、坪井がロンドンやパリで購入した図書を詳しく検討してみると [坪井1891-1892]、その大半はヨーロッパ人によるオセアニアやアフリカなどの旅行記・航海日誌というジャンルの著作物であることがわかる。例えば、ヨーロッパ人で初めてアフリカ大陸を横断した、かの著名なデイヴィッド・リヴィングストン (David Livingstone, 1813-1873) の *Missionary Travels and Researches in South Africa* (『南アフリカにおける宣教師の旅と探検』, 1857年) はその一冊である。このようにして、鳥居にとってはこれらの著書が「知識の源」というだけでなく、自らによる情報の獲得、言い換えれば、「人」・「もの」・「文化」を直接に観察・記録した「野外調査」が人類学という学問において必要欠くべからざるという意識を強く芽生えさせたものであろう。

ロシア語 1891年にシベリア鉄道の建設開始によって日露関係は新しい時代に入る。この鉄道建設の着手によって、ロシアは本格的に極東経営に乗り出す意図を明らかにし、それを意識した日本政府の指導者のあいだに「ロシアの脅威」観は急速に拡大していく [細谷1965]。このような状況下、シベリアを騎馬で単独横断した福島安正 (1852-1919) は1892 (明治25) 年6月に帰国する。そしてその一か月後に鉱物学や岩石学などを勉強するためにドイツのベルリン大学へ留学した神保小虎 (1867-1924) はまだ全線開通前だったシベリア鉄道を乗り継いで1894年10月に日本に帰る。これらの出来事を目の当たりにした鳥居は、東京帝国大学にて神保と親交を深めるなかで「シベリアおよび北方大陸」をフィールドワークとして調べるといふ希望を抱き、そのためにロシア語の勉強を始めたという。

私はその時、シベリア及び北方大陸の人類学の研究には、どうしてもロシア語の書籍を読まねばならぬ必要を感じ、余暇には神田駿河台のニコライ神学校の学生についてロシア語の勉強を始めた。当時は駿河台上にギリシャ教の大きな教会堂が建てられ、大きな鐘を鳴らし、日曜日には信者が此処に集まって礼拝した。その神父には、かのニコライ師がおられた。また道教伝道者を養成するため、会堂の傍らに神学校があって学生を養成しており、その教授に何れもロシアに留学した小西〔増太郎：筆者補足〕氏その他の教授達がおられた。(後これらの教授、学生は多くロシア文学者となった)

私はこの神学校の学生某氏からロシア語を学んだが、先ず同語の綴方から学び、文法に及び地理書などに及んだ。これでどうやらロシア語を辞書を引いて勉強が出来るようになった。しかし当時は未だ完全な『露和辞書』はなく、これに大いに困難した。[鳥居1953：40]

日本人のロシア語学習は江戸時代に大黒屋光太夫 (1751-1828) に代表される漂流民の耳学問によっではじまり、蘭学者や蘭通詞たちによって継承された。そして明治維新後は来日した宣教師の塾や官立の外国語学校、私塾・私学校などで学ばれた。1861年に正教を伝道するために来日し、日本正教会の創建者として知られるニコライ (本名イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン) (1836-1912年) は1872 (明治5) 年に「露語学校」(東京神田区駿河台北甲賀町 12 番地) を創立し、1876年にこれを改組し、7年制の寄宿学校「神学校」(正教神学校)、1884年に「女子神学校」を開設した [牛丸1969]。この学校を卒業した者のうちには、小西増太郎 (1862-1940)、瀬沼恪三郎 (1868-1945)、昇曙夢 (1878-

1958) など19世紀末からロシア語教育界や日本の文学界に大きく貢献した人がいる。しかし、明治初期にはロシア語学習熱は英語やドイツ語などと比べてそれほどのもではなく、鳥居の言葉からも窺えるように、当初はロシア語関係の語学書が少なく、入門書程度のものにすぎなかった。この状況が少しずつ変わり始めたのは文部省編輯局『露和字彙』が出版された1887年からのことであるが、実用にたる辞典が現れるのは昭和十年代のことである、という〔宮永2004〕。

鳥居はさらに次のように述べている。

この時代にはまだシベリアに関する著書はなく、僅かに参謀本部から『シベリア地誌』の一冊が出版されていたばかりであった。この書は編纂物であるが、この時代としてよき本であった。これは川上將軍が北方大陸に注意していたことから、参謀本部から特に出版されたものである。当時における我が国の北方大陸に対する知識の渴望は甚だしいものであったが、これに向って参考として読むべき書籍はなく、ただ僅かに以上の『シベリア地誌』があるのみであった。〔鳥居1953：40〕

この「川上將軍」とは、明治から昭和前期にかけて活躍した外交官の川上俊彦^{としつね} (1861-1935) のこと。川上は1884 (明治17) 年に東京外国語学校露語科を卒業後、外務省に入り、釜山領事館勤務を経て1890年にウラジオストク貿易事務官に着任した。その時からはこの都市についての情報収集に専念し、その活動結果は早くも1891年6月に刊行の『浦潮斯徳』^{ウラジオストク}と題する小冊子として現れた〔川上1891〕。加えて参謀本部編纂『西伯利地誌』は1892年12月に出版された〔参謀本部編纂課1892〕。この書は「総論」・「天然部」(自然地理)・「国体部」(人文地理)・歴史の四部からなり、ロシアの第一級学者の著作を参考にしてシベリアという広大な地域についてきわめて詳細に説明している。原暉之が述べるように、『浦潮斯徳』も『西伯利地誌』もシベリア鉄道の建設開始によって日本人のあいだに高まったシベリアへの関心が背景にあったが、さらにはロシアと対立関係にある他の国、つまりロシアへのバイアスをもった国から間接的に学ぶのではなく、直接ロシアから学ぶという姿勢に基づくものである、という〔原1998〕。

そして鳥居に関して言えばまずここで確認できるのは、彼の外国語学習に対する強い関心は言語そのものへの関心に起因するのではなく、学問的知識の獲得への意欲によるものであった、ということである。言い換えれば、外国語学習は研究や知識の蓄積・深耕を得るための必要な道具であって、研究の目的ではない。次に論じるように、1910年代になると、鳥居のフランス語論文が相次いで刊行されるようになる。そこで、西洋からの知識の摂取・受容から、西洋に向けた知識の発信へという大きな変化が見られるが、いうまでもなく、このような変化の背景には長年にわたって培われた鳥居の言語的な能力があったのである。



図4 『西伯利地誌』

ロシアは1891年にシベリア鉄道の建設を開始し、「東洋侵略」の野心をあらわにする。これを自覚した日本政府の指導者の間にシベリア地域への関心が急速に高まり、それまでのように欧米経由ではなく、自ら情報収集を始める。図は『西伯利地誌』下巻の表紙および「費牙略(ギリヤーク)人刳木船」(46頁の次)。

Ⅲ 国際人類学者としての鳥居龍蔵

フランス語の学習 上述のように龍次郎によれば、龍蔵がフランス語を習い始めたのは、徳島在住の少年時代であるが、この点については一次資料がなく、また自伝のなかに有力な情報を見つけることができない。現時点では龍蔵が1880・1890年になんらかの知識を習得したとしても、フランス語学習と本格的にかかわったのは中国西南部の調査（1902年8月～1903年3月）以降のことと考えてよいであろう。

然るに明治三十五年ごろ〔1902年：筆者補足〕、西南シナに苗族調査に行き、九ヵ月ばかり同地方で費やしたが、その際から書籍を集め始めた。旅行地方は、シナ各省で当時木版の書籍が出版せられていて、紙の質も各省で相違していた。たとえば、貴州版は唐紙でなく日本紙のような物を用い、四川省はまた蜀特別の紙があった。私はなるべく、その省の苗族を主とした地誌や歴史を集めたのであるが、これでも少しの書籍が手に入ったのである。それから上海に来ては、ケレー書店などで、英文や仏文の苗族に関する旅行記や著書を求めた。〔鳥居1935：230〕

1907（明治40）年発行の「苗族調査報告」（『人類学教室研究報告』第2編）のなかにある「苗族ニ就キテノ文籍」〔鳥居1907：12-18〕および「参考書」〔鳥居1907：284-285〕を検討してみると、英語文献やドイツ語文献のほかに、ガブリエル・デベリア（Gabriel Devéria）著*Les Lolos et les Miao-tze*（『獼猴族及び苗族』、1891年）ポール・ビアル（Paul Vial）著*Les Lolos*（『獼猴族』、1898年）、カミル・センソン（Camille Sainson）訳*Histoire particulière du Nan-Tchao*（『南詔野史』、1904年）など数多くのフランス語文献の存在を確認することができる。これらの著書は鳥居が1902年から1906年までの間に購入したものと思われるが、当然ながら、参考にできたのはある程度フランス語を理解できるからである。

そして、鳥居とフランス語との関係がどこまでさかのぼれるかは依然として不明であるが、1903年3月に中国から帰国して後、フランス語をアカデミックな環境で学んでいたのは確実である。

私はこの頃から帝大文学部で、毎日早朝に、ブフというフランス人の先生について仏語を勉強した。そして夜は暁星学校の夜学に通っていた。〔鳥居1953：103-104〕

この「ブフ」はジャン・バプチスト・ブーフ（Jean-Baptiste Beuf, 1855-1926）である。フランスのアルザス地方出身の聖マリア会宣教師で、物理学や博物学を専攻し日本人学生に教授することを目的にして1889年2月に来日したが、実際には、東京大司教でフランス語を教えていたピエール・ザヴィエ・ミュガビュール師（Pierre Xavier Mugabure, 1850-1910）の後任となり、1921年8月まで東京帝国大学と暁星学校でフランス語を教えた〔武内1995〕。暁星学校は、1888（明治21）年にフランスとアメリカから来日したカトリック修道会・マリア会の宣教師が開設した家塾が母体で、暁星小学校が1890年に、暁星中学校が1899年に設立許可された〔記念誌等編纂委員会編纂1989〕。

さらには龍次郎によると、龍蔵は東京帝国大学の仏文科のエミール・エック（Émile

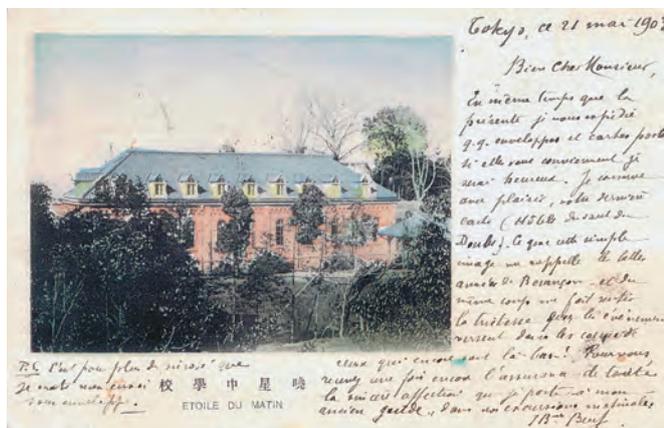


図5 フランス語と暁星中学校

暁星中学校とそのフランス宣教師は鳥居のフランス語学習において中心的な役割を果たした。写真は、鳥居にフランス語を教えた宣教師のジャン・バプチスト・ブーフが1903年3月にフランスの友人に送った絵葉書（バルント・レパッチ氏提供）。

Heck, 1868-1943) からもフランスを習った [鳥居1977]。エックは1891年に聖マリア会からの援助隊の一人として来日した宣教師であるが、1896年に東京帝国大学に仏文科を創設して、1912年までフランス語やフランス文学を教えていた。そして暁星中学校の第三代校長 (1921-1929年) も務めた [記念誌等編纂委員会編纂1989]。

しかし、鳥居のフランス語学習においてもっとも重要な人物はいうまでもなく、パリ外国宣教会のオグステン・エルネス・ツルペン神父 (Augustin Ernest Tulpin, 1853-1933) である。ツルペンは1877 (明治10) 年に来日し、秋田・盛岡・山県など各地を転任した後、1887年に名古屋教会、1907年に東京麻布教会の主任司祭に任命された。亡くなるまでそこでカトリック思想の普及や信者の指導に力を尽くし、出版営業や様々な分野の書籍・記事執筆にたずさわる他に、フランス語教育にもかかわった [陰山編1963]。そして住居に近いこともあって、鳥居のフランス語先生となったが、加えて1910年から1919年にかけて刊行されたその仏文論文の翻訳のほとんどを担当したのはこのツルペンである。⁽¹⁸⁾

フランスと西南中国 鳥居の台湾調査の成果をまとめた “Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose” (「人類学研究・台湾の先住民」) の第一部は1910年12月に、第二部は1912年1月に刊行された。続いて “Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Populations Primitives de la Mongolie Orientale” (「考古学民族学研究・東蒙古の原始住民」) (鳥居きみ子共著) は1914年3月に、“Etudes Anthropologiques. Les Mandchoux” (「人類学研究・満州人」) は1914年12月に、“Etudes archéologiques et ethnologiques. Populations préhistoriques de la Mandchourie méridionale” (「考古学民族学研究・南満州の先史住民」) は1915年10月に、そして “Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Les Ainou des Iles Kouriles” (「考古学民族学研究・千島列島のアイヌ」) は1919年1月に刊行された。東京帝国大学の *Journal of the College of Science* (『理科大学紀要』) に掲載されたこの一連の論文によって鳥居の名声は西洋とりわけフランスの学界で次第に高まり、1920 (大正9) 年にはフランス学士院 (Institut de France) より「パルム・デ・ランストルクシオン・プブリック」 (Palme de l'Instruction Publique, 「公衆教育勲章」) が授与され、次いで、1921年にパリの国際連盟人類学院の正会員に選ばれ、日本代表委員となった。「公衆教育勲章」とは、1808年にナポレオンによって制定された教育功労章 (パルム・アカデミック) の最高位の勲章で、本来パリ大学の最も優れたメンバーに与えられるものであったが、1866年から外国人も含めてフランス語教育に携わる人や日仏文化交流に貢献した人をも対象するようになった [小野2001]。

周知のとおり、鳥居にとってこれらの出来事は一生忘れることのないエピソードであり、なおかつ彼の国際的な学者としての権威や地位を疑念の余地なくあらわすものであった。にもかかわらず、鳥居とフランスの学界との関係についてはこれまでの「鳥居龍蔵研究」のなかでは注目度が意外に低く、実際その詳細は知られていない。そこでまず、ここで湧いてくる最初の疑問は、鳥居が自分の研究成果を西洋に発信するために、英語やドイツ語ではなく、なぜフランス語を選択したのか、ということである。

自伝で述べるように、鳥居は少年時代に『自由新聞』に連載された「フランス革命史の翻訳の続きもの」を読み、その中に掲げられていた「革命当時の絵を面白く見た」という [鳥居1953:17]。それはおそらく、フランス文化と接触する最初の体験であった。しかし、鳥居が学問的な理由でフランス語を学ぶ必要性を初めて強く意識したのは西南中国のときではないか、と筆者は考える。

雲南府城は、塼を以て城壁とし、城内は広く漢族は諸市街をなし、商売は最も盛んである。ここは貴州省より格式が一段高く総督が政治している。私は入城するとともに総督に面接したが、茶菓の饗応あり、府には外事課があり、フランス語のできる役人がいる。この役人がいるのは、東京がフランスの管轄地方で、この雲南省と直接の関係があるからである。私はこれから旅行その他について万事こと交渉することとなった。フランス人は、雲南にカトリック教会が多く各地に存在しているため、これらの教会で、神父として伝道しており、雲南には、東京と雲南との間にまだ鉄道的设计がないから、フランス人は東京から深い溪谷を歩き、幾多の困難をおかして、

雲南に往来しているのであって、この省は英人よりむしろフランス人の方が多く関係を結んでいる。[鳥居1953：98-99]

東南アジアにおけるフランス人の侵入はナポレオン三世がフランス宣教師団の保護を理由に1858年に遠征軍を派遣したのに本格的に始まる。フランスはその後、コーチシナ（ベトナム南部）を併合し、安南国（ベトナム中部）やカンボジア王国を保護国、トンキン（ベトナム北部）を保護領とした。そして1893年にラオス王国を保護国とし、1900年からは中国西南部の広州湾租借地を加えた。しかし、フランス極東学院の創立が物語るように、フランス人による植民地化は単なる図版上の領土拡大というだけでなく、学問的にもその意義が極めて大きいものであった。

インドシナ考古学調査団（Mission archéologique d'Indochine）を前身とするフランス極東学院（École française d'Extrême-Orient）は1900年に正式に創立され、その設置にはアカデミック組織だけでなく、軍隊および植民地局も積極的にかかわった。設置にあたっては考古学・民族学・地理学など様々な専門分野の専門家が招聘され、その構成員となったが、彼らは当時まで中国文化圏の一つとされたインドシナ文明の再評価において重要な役割を果たしたという [Singaravelou 2012]。それに加えて、鳥居はフランス極東学院のメンバーにとって決して知らない人物ではなかった。

『苗族調査報告』の書評 実には鳥居の名がフランス学界で知られるようになったのは、彼の仏文論文が世に出る前のことである。

蒙古出発以前、急いで大学から出版した『苗族調査報告』は幸いにして、支那学者として有名なシャヴァンヌ博士に認められるところとなり、同博士は私が蒙古にある間に「通報」という雑誌に極めて鄭重なる紹介と批評をせられ、私はこれによって大いに面目をほどこした。この結果、フランスの学界より、そのうちのある部分の仏訳を許されたいという書面も来ていた。私はこの際フランスに留学し、斯学を研究する機会もあったのであるが、ヨーロッパに行き学ぶよりも、東亜を自ら実地に研究する方が極めて大切であると信じ、遂にパリに行かなかった。またアメリカのある学界から私に対しその学歴を送付ありたいと書いて来たこともあった。[鳥居1953：152-153]

この「シャヴァンヌ博士」とは、フランスの歴史学者・東洋学者のエドゥアール・シャヴァンヌ（Édouard Chavannes, 1865-1918年）である。本来哲学を専門したシャヴァンヌは二十歳の時にガブリエル・デベリアのもとで中国語を勉強しはじめ、1889年にフランス大使館の随員として北京に派遣された。その時から中国最初の紀伝体の通史とされる司馬遷著『史記』の注釈付の翻訳という膨大な作業を開始し、これは五つの巻に分けて1895年から1905年にかけて出版された。さらにシャヴァンヌの関心は文献資料だけでなく、考古学や金属学方面にも及び、例えば鳥居の「苗族調査報告」が出版された同年に *Mission archéologique dans la Chine Septentrionale*（『北方中国の考古学調査』）を刊行した [Diény 2012]。

さて、『通報』 *Toung Pao* という雑誌は、フランス人の中国学者アンリ・コルディエ（Henri Cordier, 1849-1925）とオランダ人の東洋学者グスタフ・シュレーゲル（Gustave Schlegel, 1840-1903）が1890年に創刊したもので、東アジアの諸文化を学問的な対象とした最初の国際雑誌とされる [Ang 2012]。シュレーゲルが亡くなった後、シャヴァンヌはその編集者の一人となった。そこで彼は鳥居の「苗族調査報告」を1908年5月刊行の『通報』第9巻・第2号で次のように紹介している。

鳥居先生は1902年に湖南省、貴州省、雲南省および四川省の地域で民族学調査を行い、長期にわたり綿密な研究で南中国の先住民族に関する資料を少なからず収集した。今回ここに刊行されるこれらの研究成果は日本の科学にとって輝かしい榮譽となるであろう。まず、その旅行を簡潔

に記述し、日本人・中国人およびヨーロッパ人による文献を紹介した後、先住民族の名称および地理学的な分布について述べる。次の重要な章では身体観察・測定の結果を示し、さらに言語を検討する。それから、苗族の風習および工芸を論じ、衣服の文様、楽器、および近年ヨーロッパ人の研究者の注目を集めている銅鼓についての興味深い考察を述べている。報告書の最後にある44の図版では写真を2枚ずつ載せており、民族学上数多くの資料を与えてくれる。1905年に蒙古および満州を訪れた鳥居氏にはこれからもこのような報告書を期待しています。鳥居氏と喀喇沁の皇子との親しい関係はよく知られており、西南中国の調査と同様に数々の資料を収集する機会を得ることができたのであろうと思います。[Chavannes 1908；筆者訳]

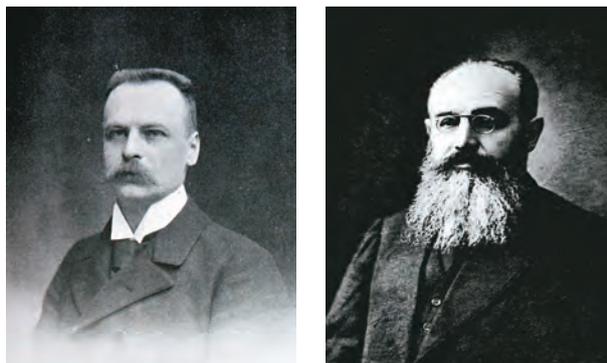


図6 シャヴァンヌとペリ
フランス研究者のエドゥアール・シャヴァンヌと（左）ノエル・ペリ（右）が書いた鳥居著「苗族調査報告」（1907年）の書評によって鳥居の名は初めて西洋の人類学界において広く知られるようになった（左写真は[Cordier 1917]、右写真は[Maitre 1922]より転載）。

さらには一カ月後、日本研究家でフランス人宣教師のノエル・ペリ（Noël Péri, 1865-1922）はフランス極東学院の機関誌*Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*（第8巻・第1号）に「苗族調査報告」を紹介し、その構成と内容を詳しく説明した後、次のように評価している。

要するにこの報告書は、複雑な様子を示す南アジアの諸人種の研究に対して大きな貢献をなすものであり、鳥居龍蔵氏および東京帝国大学の人類学教室に光栄をもたらすものであろう。[Péri 1908；筆者訳]

ノエル・ペリ（「ペリー」とも）は1889（明治22）年にパリ外国宣教会宣教師として来日し、6年間長野県松本市に滞在したのち、東京に移った。そこで、布教のかたわら東京音楽学校で和声学、作曲法などを教えたが、世紀転換期から日本文化研究者として本格的な活動を開始し、仏教や能についてヨーロッパの日本文化学界でよく知られる業績を残している。ペリは1906年に日本を離れ、ハノイに定住したが、フランス極東学院の客員となり、その後も時折日本を訪れた [Beillevaire 2012]。現時点ではペリと鳥居との関係の詳細は不明であるが、現在徳島県立鳥居龍蔵記念博物館で所蔵されている鳥居の図書のなかにペリ著“*Études sur le drame lyrique japonais nō. II. Le nō d'Oimatsu*”（「日本歌劇の能についての研究—老松の能」第二号）[Péri 1911]を見ることができることから、お互いに存在を確認していたはずである。

むすびにかえて—外国語との関係から見た鳥居龍蔵と日本人類学史

上述のように1910年12月に鳥居の最初の仏語論文である“*Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose*”が刊行され、それ以降相次いで仏語論文が刊行される。そしてそれに伴ってフランス極東学院の機関誌をはじめとして、フランスの様々な学術雑誌が鳥居の報告書を取り上げて紹介していった [Chavannes 1911, Ravenau 1911, Maspero 1914]。鳥居の業績が具体的にどのような評価を受けたかについては、今後検討しなければならない課題であるが、ここでは最後に鳥居とフランス・フランス語との関係をまとめ、そして西洋と近代日本における人類学の歴史についての考察を一二書き加えたい。

独仏戦争はフランスの勝利となった結果、科学や文学はほとんどフランスが中心となり、人類学の如きもパリ—世界人類学連盟会を設け、世界の人類学者の同盟をなすこととなり、大正十

年〔1921年：筆者補足〕一月、同会より私に対し正会員と日本同学代表委員に推薦してこられた。これは私にとっては最も名誉のことである。またこれより先、フランス・パリー学士院より私にパルムアカデミー勲章を贈られた。〔鳥居1953：205〕

第一次世界大戦後はヴェルサイユ条約に基づいたヴェルサイユ体制が国際関係の柱となった。フランスは世界五大国の一つとしての地位を維持するのみでなく、オスマン帝国領であったシリアとレバノン及びドイツ植民地であったトーゴとカメルーンを獲得し、植民地を拡張させた。そしてこうした国際情勢のなかで日本では日仏会館の設立（1924年）が象徴するようにフランスに対する新たな親近感が生まれた。だが、鳥居に関して言えば、彼とフランス語との学問的な意味での関係が生まれたのは少なくとも1902年のことで、これを正しく理解するにあたっては東南アジアにおけるフランス人による研究や学術的な環境の形成過程を再考する必要があるのではないかと筆者は考える。

近代日本における人類学研究は、当時「石器時代」の物質的な所産として認識された石器や土器などに対する考古学的な関心と相まってスタートする。この意味では明治初期の日本を訪れた西洋人の果たした役割がよく知られているが、しかしここでまず注意したいのは、当時の日本人相手に対する彼らの姿勢は決して一様なものではなかったということである。大森貝塚の発掘調査で有名なアメリカ人の生物学者エドワード・S・モース（Edward S. Morse, 1838-1925）は自分の英文報告書をいち早く日本語に翻訳させて、日本人の間にその研究成果を発信する必要性を強く自覚するものであった。またモースに対してアイヌ説を唱えた日本駐在のオーストリア公使館秘書官のハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold, 1852-1908）は同じころに和文考古学概説書の最初の一つとされる『考古説略』を著した。その一方、古墳研究の先駆者として知られるイギリス人の化学兼冶金技師のウィリアム・ゴランド（William Gowland, 1844-1922）、および、日本の「石器時代」に対して初めて具体的な年代を与えた地質学者のジョン・ミルン（John Milne, 1850-1913）の考古学報告書はもっぱら英文で、当時その成果を直接に知る日本人がきわめて少なかったのである。

西洋人が日本人向けにあるいは西洋人向けに書いたのと、それぞれの方向性は異なるが、坪井をはじめとする若手の日本学者は、西洋人による日本研究そのものを、日本と西洋との非対称的な関係の「証明」として、つまり、日本が西洋の下にあるという国際的な上下関係を証明するものとして早い段階から意識した。1880年代中ごろから、これらの学問が組織化の道を進み始めると、日本人は今度は、「観察者」の立場となり、そこで「現時点での他者」である「アイヌ」および「過去の他者」である「石器時代人」を主な研究の対象にした。だが、坪井を中心とする東京人類学会のメンバーによる人類学・考古学的な知識の構築は当初、単純にある学説を証明するという目的だけでなく、誕生間もない人類学と考古学の社会的な知識の向上を図るものでもあった。したがって、その知識の発信は日本人の「読み手」を前提としたもので、必然的に日本語で実体化していくものであった。

ところが、東京人類学会の創立から10年、20年経っても、このような姿勢は大きく変わることなく、日本人学者による海外（西洋）に向けた知識の紹介・伝達する著作物は極めて少なかった。なかでも特に注目すべきは坪井の態度である。例えば、その論文目録は1100件を超えるにもかかわらず、英語論文は三件しかみられない〔東京人類学会編1913〕。三年間にわたる欧州留学の経験があり、英語が堪能であった坪井の態度は単純に言語上の制限でなく、より奥深い理由によるものであろう。

鳥居がもっていた外国語に対する認識を最も鮮明に映し出しているのはおそらく、長男龍雄の死去をきっかけに記した「若き人類学者鳥居龍雄」という文章である。

私が彼〔鳥居龍雄のこと：筆者補足〕を留学せしめた目的は、なるべく国際的の人類学者として立たしめたかったからです。これは彼も承知のことでありました。日本には青年期から真に人類学を欧州の大学に入って正しく学んだ人は一人もいない。おおむねカタワラ仕事でやっている

のであります。また外国学者と正しく話し合ったり論文を外国語で正しく書ける人も極めて少ない。私は常にこのことについてにがい経験を有するものであるから、なるべく彼に将来こんな不自由なことをさせたくなかったのであります。

招来真の学者は国際的位置に立たねばなりません。この点において外国語の素養は最も必要であります。これには外国に留学するのが最もよろしい。かつや外国には一流の学者がありますから、これらの先生に師事し、若い時から学ぶのが最もよろしい。[鳥居1927 (1977) : 464]

同世代の日本人類学者のなかで鳥居ほど国際的なランゲージの必要性を意識したものはなく、彼の仏語論文によって日本の人類学は初めて真に国際的な学問になった、と言っても過言ではないであろう。むろん、人類学の歴史は西洋の列強による植民地獲得と不可分な関係があり、近代日本における人類学もまた、大日本帝国の版図拡大と並行して展開したのは言を俟たない事実である。したがって、ここでいう「国際的なランゲージ」とは、西洋や日本が中心となる「観察者側」の共通の言語で、「自己」が「他者」に関する言説を語るための道具のことである。しかし、今日的な視点から鳥居の学問的な歩み、とりわけ本稿で論じたその外国語学習過程を考えると、まず見逃してはならないのは、西洋との学問的な関係が決して「受信」のみでなく、相互の言葉を通した双方のコミュニケーションに基づくべきという鳥居の姿勢である。21世紀に生きる私たちが鳥居に学ぶべきは、実にこのことではないかと強く思うのである。

謝辞

本稿は、筆者が独立行政法人国際交流基金のフェローシップにより2013年8月に徳島県立鳥居龍蔵記念博物館で行った研究成果の一部をまとめたものです。研究成果のとりまとめにあたっては下記の方々や機関より、資料紹介や御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

天羽利夫、鳥居 喬、高島芳弘、長谷川賢二、下田順一、岡本治代、松永友和、土居貴代子、真田万里、ベルント・レパッチ、フランス国立医科学院。

注

- (1) 諏訪鹿三については、[金子・高野1914, 南1928, 北海道大学編著1982]を参照。
- (2) 1886年12月発行の*Report of the Sapporo Agricultural College*では諏訪は“Teacher, Tokushima Ken Middle School; and Officer”[Hokkaidō Chō 1886:126]とある。また[金子・高野1914]や[南1928]によると、諏訪が東京に移ったのは1888年のところであるが、1887年10月出版の『農業地質化学問答』に掲載されている諏訪の居所は「日本橋区馬喰町二丁目四番地山岸重方同居」である[諏訪1887:奥付]。
- (3) *Annual Report of Sapporo Agricultural College*に掲載されたランクによると、諏訪の位置は次の通りである。学年1877-1878前期16/19, 後期13/17; 学年1878-1879前期15/17, 後期17/17; 学年1879-1880前期17/17, 後期12/17; 学年1880-1881前期11/12 [Sapporo Agricultural College 1878-1881]。1881年後期および1882年のデータは未確認。
- (4) 大塚秀松編『英学独稽古単語 英和字書-附・会話』(文書堂, 1885) および大塚秀松編『英学独稽古単語 英和字書-附・会話』(鈴木書屋, 1886) というものが存在するが、これは鳥居のいう『英和字書』であるかどうかは不明である。また、鳥居著「私の読書と蔵書」では『英和字書』ではなく、「英語辞書」としている([鳥居1935])。
- (5) 阿波文庫については、[徳島県立光慶図書館編 1922, 徳島県立文書館編集・発行1998, 原由1999・平井2001]を参照。
- (6) 鳥居龍蔵「私の半生と丸善」(『学燈』第47巻・第12号, 1943年, 46頁)に「明治二十年の頃」とある。
- (7) 正は谷千生。
- (8) 第二版は1880年, 第三版は1881年, 第四版は1885年, 第五版は1888年に出版された。
- (9) 遺物の日本語名は原著による
- (10) 原著には「之ヲ使用シタル人種ハ明カニ知ル可ラスト雖恐クハ今ノ人種ノ前ニ住ミタリシト云フ人種ニシテ古史ニ所謂土蜘蛛若クハ蝦夷ノ類ナルヘシ」[神田1886:1]とある。

- (11) 完全書名は*Primitive Culture : Researches into the development of mythology, philosophy, religion, language, art and custom* (『原始文化—神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究』)。
- (12) 西洋人類学の思想史については、[Kuklick 2008] および [Eriksen and Nielsen 2001] を参照。
- (13) 所在地・開設申請年月は宮永孝による「東京のドイツ語塾一覧表」[宮永2004:328-332]。しかし、共研学舎纂訳『独逸作文要略 第壺之部』(1882年, 奥付)によると、「共研学舎」の所在地は「本郷区真砂町三十五番地」である。また『官立私立東京諸学校一覧』(1888年, 131頁) および『東京留学指針』(1888年, 82頁)によると、「東京全修学校」の所在地は「小石川区下富坂町」であるが、「東京全修学校」は早くも1887(明治20)年頃廃校になった[安藤・箕輪編1903]。
- (14) 小西孝四郎については『茨城県教育家略伝』によると、「君ハ新治郡柿岡町ノ人」で、1891年に「筑波郡谷井田校ニ在勤シ村長ト意相投シ校務ノ改良ニ就クモノ至大ナリト云フ今ヤ該郡有為ノ少壯教育家壯トシテ名誉高シ新任後村会君ノ増俸ヲ申請ス宜ナリ矣」[平沼1894:頁不詳]。著書や論文には『茨城県地理教科書』(1900年), 『姫路案内』(1913年), 「姫路貝塚の発見」(『人類学雑誌』第31巻・第8号, 1916年) などある。
- (15) 鳥居の自伝によると、丸山がシュリーマンの死去(1890年12月26日)を知ったのは電報によってということで、講演がその直後に行われたと推定する。
- (16) 著書には『羅馬字のすゝめ』(1906年), 『独文実学読本』(1917年), 『独逸語発音図解』(1918年) などある。
- (17) 正はカトルファージュ。
- (18) “Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose”の第二部 および “Etudes Anthropologiques. Les Mandchoux”の本文をフランス語に訳したのはフランス海軍医官A・シェマン(A. Chemin)であるが、その詳細および鳥居との関係は不明である。
- (19) 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館に所蔵されている鳥居の図書のなかにシャヴァンヌ編訳『史記』第2・3巻がみられる。
- (20) 完全な雑誌名は “T'oung Pao ou archives concernat l'histoire, les langues, la géographie et l'ethnographie de l'Asia Oriental” (『通報—東アジアの歴史・言語・地理および民族誌に関するアーカイブズ』) である。

参考文献

(和文)

- アバ・ラファエル 2008 「日本におけるヨーロッパ近代考古学思想の導入—「三時代法」および「先史」の観念を中心として—」『北大史学』48, 北大史学会, 69-98頁。
- 天羽利夫 2011 「鳥居龍蔵と『徳島人類学材料取調仲間』」『鳥居龍蔵研究』1, 鳥居龍蔵を語る会, 21-38頁。
- 安藤紫陽・箕輪撫鬘編 1903 「村田直景翁(画家村田丹陵氏の父)」『名士の父母』文武堂, 89-100頁。
- 池田哲郎 1970 「四国英学史(下)—讃岐と阿波」『英学史研究』2, 日本英学史学会, 99-112頁。
- 牛丸康夫 1969 『明治文化とニコライ』教文館。
- 江利川春雄 1996 「小学校における英語科教育の歴史(5)—全体像の把握をめざして—」『日本英語教育史研究』11, 日本英語教育史学会, 131-183頁。
- 小野吉郎 2001 「フランス教育史探訪 パルム・アカデミック(フランス教育功労勲章)概要」『日仏教育学会年報』8-30, 日仏教育学会, 189-194頁。
- 陰山栄編 1963 『ツルペン神父の生涯とその思い出』中央出版社。
- 金子郡平・高野隆之編 1914 『北海道人名辞書』北海道人名辞書編纂事務所, 614-615頁。
- 川上俊彦 1891 『浦潮斯徳』大倉保五郎。
- 神田孝平 1886 『日本大古石器考』叢書閣。
- 記念誌等編纂委員会編纂 1989 『暁星百年史』暁星学園。
- 小西孝四郎 1900 『茨城県地理教科書』増田秀吉。
- 小西孝四郎 1913 『姫路案内』小西孝四郎。
- 小西孝四郎 1916 「姫路貝塚の発見」『人類学雑誌』31-8, 東京人類学会, 259-262頁。
- 興文社編 1889 『東京留学指針』興文社。
- 共研学舎纂訳 1882 『独逸作文要略 第壺之部』共研学舎。

- 西條敏美 2009 「日本の数学者とふるさと 武田丑太郎」『数学セミナー』48-4, 日本評論社, 41頁。
- 参謀本部編纂課 1892 『西伯利地誌』上・下, 参謀本部。
- 鈴木周作抄訳・櫻井省三校閲 1912 『ペルリ提督 日本遠征記』大同館。
- 諏訪鹿三編訳 1887 『農業地質化学問答』上・中・下, 香松社。
- 諏訪鹿三 1893 『農業新書』集英堂。
- 曾我部一行その他 2007 「『人類学雑誌』考—民俗学の揺籃期」『成城文藝』201, 成城大学, 119-172頁。
- 高梨健吉 1978 『文明開化の英語』藤森書店。
- 武内 博 1995 『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』大高利夫発行者。
- ツェーラム, C・W 1962 『神・墓・学者 考古学の物語』(村田数之亮訳)中央公論社。
- 東京人類学会編 1888 「会員出張及旅行」『東京人類学会雑誌』4-41, 東京人類学会, 452頁。
- 東京人類学会編 1894a 「土俗會談話録」『東京人類学会雑誌』9-94, 東京人類学会, 144-151頁。
- 東京人類学会編 1894b 「第二回土俗会」『東京人類学会雑誌』9-103, 東京人類学会, 481-504頁
- 東京人類学会編 1913 「故坪井理學博士論文目録」『東京人類学会雑誌』28-11, 東京人類学会, 627-654頁。
- 坪井正五郎 1887 「人類学当今の有様」『東京人類学会雑誌』2-18・3-21, 東京人類学会, 267-280・31-37頁。
- 坪井正五郎 1888 「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌』5-48, 東京人類学会, 152頁。
- 坪井正五郎 1891 「我が書棚」『東京人類学会雑誌』6-62, 東京人類学会, 214-216頁。
- 坪井正五郎 1891-1892 「我が書棚」『東京人類学会雑誌』6-63・64, 7-68~70・72・74, 東京人類学会, 316-323・354-356・61-65・103-105・135-138・214-216・272-277頁。
- 徳島県立光慶図書館編 1922 『図書館沿革史—学制頒布五十年記念』徳島縣立光慶図書館。
- 徳島県立文書館編集・発行 1998 「阿波国文庫と淡路国文庫」(第17回企画展パンフレット)。
- 鳥居龍蔵 1907 「苗族調査報告」『人類学教室研究報告』2, 東京帝国大学理学部, 1-285頁。
- 鳥居龍蔵 1927〔1977〕「若き人類学者鳥居龍蔵—本篇を我が子龍蔵に捧ぐ」『太陽』33・4, 博文館, 168-176頁〔『鳥居龍蔵全集』12, 朝日新聞社, 459-466頁〕。
- 鳥居龍蔵 1935 「私の読書と蔵書」『書物展望』5・9, 書物展望社, 227-233頁。
- 鳥居龍蔵 1943 「私の半生と丸善」『学燈』47・12, 丸善株式会社, 46-49頁。
- 鳥居龍蔵 1953 『ある老学徒の手記—考古学とともに六十年』朝日新聞社。
- 鳥居龍次郎 1977 「父と外国語」『鳥居龍蔵全集付録月報』4, 朝日新聞社。
- 日外アソシエーツ編 2011 『明治大正人物事典』(Ⅱ 文学・芸術・学術篇)日外アソシエーツ・紀伊國屋書店, 596頁。
- 原 暉之 1998 『ウラジオストク物語—ロシアとアジアが交わる街—』三省堂。
- 原由美子 1999 「幻の阿波国文庫」西村圭子編『日本近世国家の諸相』東京堂出版, 199-228頁。
- 久野金治郎 1888 『官立私立東京諸学校一覧—附・入学試験課目及校則』伊藤誠之堂。
- 平川 新 1998 「歴史にみるロシアと日本の出会い—日本の漂流民とロシアの対応—」『東北アジア研究』2, 東北大学東北アジア研究センター, 199-210頁。
- 平沼秋之助 1894 『茨城県教育家略伝』前編・上, 進文社。
- 細谷千博 1965 「日露・日ソ関係の史的展開」『国際政治』31, 日本国際政治学会編, 1-15頁。
- 北海道大学編著 1982 『北大百年史』〔通説編〕ぎょうせい, 29-74頁。
- 平井松午 2001 「徳島大学附属図書館蔵の『近世古地図・絵図コレクション』の来歴」『徳島地理学会論文集』4, 徳島地理学会, 179-191頁。
- 南 精一 1989 「明治時代におけるSpelling Bookについて—Webster本の訳を中心に—」『日本英語教育史研究』4, 日本英語教育史学会, 111-129頁。
- 南鷹次郎 1928 「故諏訪鹿三君小伝」『札幌同窓会報告』50, 札幌同窓会, 26-27頁。

- 宮永 孝 2004 『日本洋学史—葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』三修社。
 三好昭一郎・大和武生編著 1983 『徳島県の教育史』思文閣出版, 176-185頁。
 山住正巳 1987 『日本教育小史—近・現代』岩波書店。
 吉開将人 2013 「鳥居龍蔵と銅鼓研究—鳥居を「民族史学者」へと導いたもの」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館』1, 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館, 149-169頁。
 若林勝邦 1890 「日本ニ現存セル銅鼓ノ歴史及び其種類」『渉史餘録』早稲田大学出版部, 29-35頁。

(欧文)

- Alix, M. le Dr., 1891, “Éloge de Nicola Joly”, *Memoires de l'Académie des sciences*, inscriptions et belles-lettres de Toulouse, Tome III, pp. 491-524.
 Ang, Isabelle, 2012, “T'oung Pao”, Pouillon, F. (éd.), *Dictionnaire des orientalistes de langue française (Nouvelle édition revue et augmentée)*, Paris : IISMM-Karthala, pp. 992-994.
 Beillevaire, Patrick, 2012, “Péri Noël”, Pouillon, F. (éd.), *Dictionnaire des orientalistes de langue française (Nouvelle édition revue et augmentée)*, Paris : IISMM-Karthala, pp. 792-793.
 Chavannes, Édouard, 1908, “Torii Ryūzo: Rapport sur une enquête au sujet des populations Miao”, *T'oung Pao*, Vol. 9, n.2, pp. 274-275.
 Chavannes, Édouard, 1911, “R. Torii: Les aborigènes de Formose (premier fascicule)”, *T'oung Pao*, Vol. 12, n. 1, pp. 103-104.
 Cordier, Henri, 1917, “Necrologie - Édouard Chavannes”, *T'oung Pao*, Vol.18, pp. 114-147.
 Diény, Colette, 2012, “Chavannes Édouard”, Pouillon, F. (éd.), *Dictionnaire des orientalistes de langue française (Nouvelle édition revue et augmentée)*, Paris : IISMM-Karthala, pp. 220-221.
 Eriksen, Thomas H., and Nielsen, Finn S., 2001, *A History of Anthropology*, London : Pluto Press.
 Hawks, Francis, 1856, *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan Performed in the Years 1852, 1853 and 1854 under the Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. Washington: A.O.P. Nicholson by order of Congress, 1856.
 Hokkaidō Chō, 1886, *Sixth Report of the Sapporo Agricultural College*, Sapporo.
 Joly, Nicolas, 1879, *L'Homme Avant Les Métaux*, Paris : Librairie Germer Baillière et Cie.
 Joly, Nicolas, 1883, *Man Before Metals*, New York : D. Appleton and Company.
 Kanda, Takahira, 1884, *Notes on Ancient Stone Implements, &c., of Japan*, Tokio : Kokubunsha.
 Kuklick, Henrika, 2008, “The British Tradition,” Kuklick, Henrika (ed.), *A New History of Anthropology*, Wiley-Blackwell, pp. 52-29.
 Maître, Claude E., 1922, “Noël Péri,” *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, Tome 22, pp. 404-417.
 Maspero, Henri, 1914, “Torii Riuzo et Torii Kimiko—Études archéologiques et ethnologiques. Populations primitives de la Mongolie Orientales,” *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, Tome 14, pp.79-80.
 Péri, Noël, 1908, “Torii Ryūzō 鳥居龍蔵—Byōzoku chōsa hōkoku 苗族調査報告 (Rapport sur une enquête sur les tribus Miao),” *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, Tome 8, pp. 276-277.
 Péri, Noël, 1911, “Études sur le drame lyrique japonais nō. II. Le nō d'Oimatsu,” *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*, Vol. 11, No. 11, pp. 111-151.
 Quatrefages, Armand de, 1879, *The Human Species*, New York : D. Appleton and Company.
 Raveneau, Louis, 1911, “Torii (R.) Études Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose. 1^{er} fascicule,” *Annales de Géographie. XX^e Bibliographie Géographique Annuelle*, Vol. 11, pp. 188-190.
 Sapporo Agricultural College, 1878-1881, *Annual Report of Sapporo Agricultural College*, Vol. 1st, 2nd, 3rd, 4th, 5th, Tokei : published by the Kaitakushi.
 Singaravélou, Pierre, 2012, “École Française d'Extrême-Orient (EFEO)”, Pouillon, F. (éd.), *Dictionnaire des orientalistes de langue française (Nouvelle édition revue et augmentée)*, Paris : IISMM-Karthala, pp. 372-374.

- Stocking Jr., George W., 1979, "Tylor, Edward Burnett" *International Encyclopedia of the Social Sciences*, New York: Macmillan, Vol. 16, pp. 170-177.
- Suwa, Shikazo, 1901(1893), "Forests in Japan", World's Columbian Exposition, Chicago, Ill., 1893, *Report of the Committee on Awards of the World's Columbian Commission*, Vol. I, Washington: Government Printing Office, pp. 551-556.
- The American Naturalist (ed.), 1883, "Joly's Man Before Metals", *The American Naturalist*, Vol. 17, No. 8 (August 1883), pp. 848-851.
- Torii, R., 1910-1912, "Etudes Anthropologiques. Les Aborigènes de Formose," *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*, Vol. 28 · 32, Art. 6 · 4.
- Torii, Riuzo, 1914, "Etudes Anthropologiques. Les Mandchoux," *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*, Vol. 36, Art. 6.
- Torii, Riuzo, 1915, "Etudes archéologiques et ethnologiques. Populations préhistoriques de la Mandchourie méridionale," *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*, Vol. 36, Art. 8.
- Torii, Riuzo, 1919, Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Les Ainou des Iles Kouriles," *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*, Vol. 42, Art. 1.
- Torii, Riuzo, et Torii, Kimiko, 1914, "Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Populations Primitives de la Mongolie Orientale," *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*, Vol. 36, Art. 4.
- Tylor, Edward B., 1865, *Anahuac: or, Mexico and the Mexicans, ancient and modern*, London : Longman, Green, Longman and Roberts.
- Tylor, Edward B., 1871, *Primitive Culture: Researches into the development of mythology, philosophy, religion, language, art and custom*, Vol. I & II, London : John Murray.
- Tylor, Edward B., 1881, *Anthropology: an introduction to the study of man and civilization*, London : Macmillan and Co.

